

2016 年度  
ニューサウスウェールズ大学  
海外日本語教育実習報告書

お茶の水女子大学大学院日本語教育コース  
グローバル教育センター  
グローバル人材育成推進センター

# 目次

巻頭言（森山新） .....	2
<b>【Part 1】</b>	
実習の概要（閔暁晗） .....	3
UNSW の日本語教育（閔暁晗） .....	4
実習の内容（全員） .....	7
その他の活動（何佳容、奥西麻衣子） .....	18
事前学習（金秀恵） .....	20
<b>【Part 2】</b>	
手続きと生活（唐姣姣） .....	23
実習を通して学んだこと（全員） .....	25
おわりに（八木友香里） .....	33
総評 1（加納なおみ） .....	35
総評 2（森山新） .....	36



## 巻頭言

森山 新

日本語教育コースの海外日本語教育実習は、かつては、オーストラリア、台湾、韓国などで実施されていたが、諸般の事情で中断していた。この実習を再開すべく 2011 年度に ニューサウスウェールズ大学(以下「UNSW」)と本学との間に大学間学術交流協定が締結された。翌 2012 年度、本プログラムは日本学術支援機構(JASSO)のショートビジットプログラムに採択され、その支援のもと 9 年ぶりに海外日本語教育実習が再開された。

2013 年以降は、本学がグローバル人材育成推進事業に採択され、海外にて活躍するグローバル人材としての日本語教師養成としての位置づけもなされて開催されている。今年度は国際交流基金「海外日本語教育インターン派遣プログラム」に採択、その支援のもとで、UNSW にて 8 月から 9 月まで、7 名と最大数の派遣のもと実施され、初級、中級、上級、プロフェッショナルと全学年の授業での実習が実施された。また事前研修は、日本語教育コースの加納なおみ先生が「日本語教育実習」の授業を通し実際のシラバス作成や教壇実習などについての事前研修を実施した。

受け入れ機関の先生方からは、実習生たちは実に優秀で、学生たちからの人気も高く、今後もぜひお茶大から学生を派遣してほしいなど、実習生の実習を高く評価する声が多数寄せられた。

日本語教育を専攻とする学生たちは、単に研究者としてだけではなく、教育者としての顔も有している。さらにグローバル時代において、海外に積極的に出て行き、活動する社会性も必要としている。その意味でこの海外日本語教育実習の定着・発展は非常に意義深いものと言わざるをえない。また日本語教育研究は日本語教育の発展に資することが要求され、その意味でも研究と並行して日本語教育実践を伴うことは非常に好ましい形であるということができよう。そう考えると、今回、海外日本語教育実習生が増加し、かつ参加した学生が大きく成長してくれたことは、非常に喜ばしいことである。

本報告書は、参加者が実習を通じどのような学びが与えられ、どのような成長を遂げたかということを示すとともに、これから海外実習を行おうとしている学生たちに、実習の意義を伝えてくれることが期待される。この報告書を読んだ多くの学生が彼らに続き、海外に赴き、教育者としてグローバル人材として大きく成長する機会を得ていただければと思う。

最後になったが、本プログラムの成功のためにご尽力くださった、UNSW の先生方、国際交流基金の白崎正弘氏をはじめとした「海外日本語教育インターン派遣プログラム」担当の方々、本学学生の送り出しにご尽力くださった加納なおみ先生をはじめとした日本語教育コースの先生方、グローバル教育センターの戸谷陽子センター長、担当の長塚尚子さんをはじめとした先生方・スタッフ、国際課の皆様に心から感謝の意を表したい。

2017 年 3 月 (海外日本語教育実習担当)

# 【Part 1】 実習の実際

## 1. 実習の概要

今回の実習は、国際交流基金の支援を受け、「日本語教育方法論演習」の授業として、2016年8月4日～9月25日の7週間にわたってニューサウスウェールズ大学 (The University of New South Wales、以下 UNSW) にて行われた。担当教員は森山新先生、参加者は日本語教育コースの学生：博士後期課程3年の金秀恵、博士前期課程1年の八木友香里、奥西麻衣子、清水晶子、何佳容、唐姣姣、閔晔晗<sup>トウヨウヨウ エンギョウカン</sup>であった。実習期間は、金、唐が初級前半クラス、奥西、閔は初級後半クラス、八木、何が中級クラス、清水が上級クラスで実習を行った。細かい内容については、次章以降で説明する。

### 実習の流れ

日付	内容
4月	説明会
4月21日(木)	事前研修開始
7月28日(木)	事前研修終了
8月4日(木)	出国(金、八木、清水、何、唐、閔)
5日(金)	授業見学
7日(日)	出国(奥西)
8日(月)	授業見学開始 ※1
10日(水)	トムソンゼミ勉強会参加 ※2
12日(金)	初回ミーティング、担当レベル決定
14日(日)	実習開始
16日(火)	<i>North Sydney Girls High School</i> 訪問
19日(金)	国際交流基金 シドニー日本語文化センター 訪問
9月6日(火)	<i>Murray Farm Public School</i> 訪問
23日(金)	実習終了
25日(日)	帰国

※1 五日間全てのレベルを見学

※2 毎週の水曜日

## 2. UNSW の日本語教育

### Community of Practice (CoP)

UNSW 日本語コースでは、Introductory(初級前半)のコースに Professional(中級後半)の学生がジュニア先生として参加しサポートしたり、Intermediate(初級後半)のクラスに Professional のクラスの学生が訪問し、日本語でインタビューをしたりするなど、レベル間の交流が活発に行われている。また、Capstone のクラスでは、シドニーの日本人居住者の前で日本に関するリサーチの発表が行われる。さらに、9月に行われるスピーチコンテストには、UNSW から毎年学生が参加しているが(今年度は7名)、そこでは、高校生や他大学の日本語学習者とも交流がある。

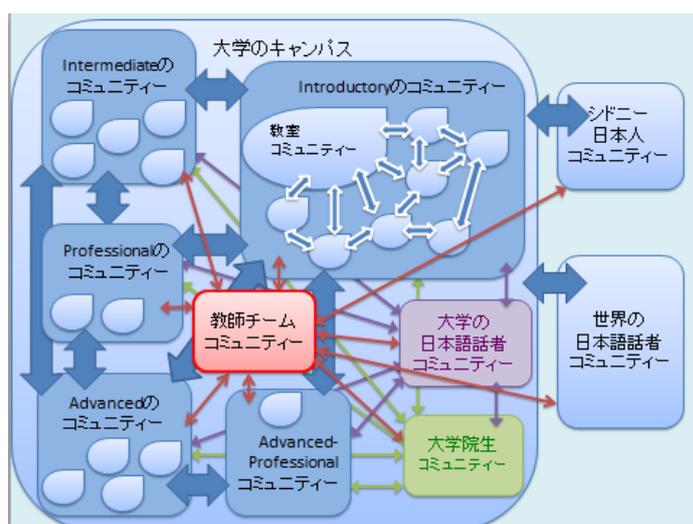


図1 UNSW Japanese Community of Practice

図1のように、UNSW の日本語コースでは、Community of Practice (CoP)という考えに基づき、各クラス、各レベルなどをそれぞれ1つの『コミュニティ』と考え、同じレベルのクラス間、異なるレベルの授業間、そしてクラスと学校外の日本語話者コミュニティの間に関係が、さらに大きなコミュニティを形成していると考えている。それぞれの小コミュニティは個々に独立して存在するのではなく、相互に交流が行われることで共存している。

JFL 環境では、学生が生の日本語に触れたり、日本語を話したりする機会が少ないため、そのような機会を増やすには、既存の伝統的な教室や教師、コースの枠を超え、クラスコミュニティ内外での日本語コミュニティとの接触を促進させるような状況を作り出していく必要がある。

このように、レベル間や学内外の壁を超えた様々な日本語コミュニティを築くことで、UNSW の日本語学習者はより多様な日本語に接することになり、また、日本語の実際使用場面を作り出すことができる。さらに、その実際使用や上級の日本語学習者をロールモデルとすることで学習の動機が高まり、自身の考えを明確に表現できるようになり、他者との相互作用の中でどのように自身の能力を高めていけばいいのか、自らの力で理解していく。

## ジュニア先生

ジュニア先生とは、**Professional** 以上の学生が **Introductory** のコースにジュニア先生として参加する **Professional** コースのプロジェクトの一つである。ジュニア先生となった学生は事前に担当教師とミーティングを行い、授業では学生の質問に答えたり、モデル会話を見せたりする。**Introductory** と **Professional** の担当教師がそれぞれジュニア先生の評価を行う。このプロジェクトの利点は、第一に、**Introductory** の学生がジュニア先生をロールモデルとし、日本語学習の目標を明確にすることができるということである。第二に、教師以外の支援者の存在である。それにより、学生は質問があれば、気軽にジュニア先生に尋ねることができ、また、教師とジュニア先生から日本語コミュニケーションの方法を学ぶことができる。第三に、ジュニア先生となった学生は、担当教師との授業ミーティングや授業の指示などを日本語で行うため、日本語を実際に使用する機会を多く持つことができる。日本語を使う場が限られている **JFL** 環境では、このような機会は重要となる。第四に、ジュニア先生自身が自分の伸びを確認できる。日本語学習者は中級以上になると、自分の伸びを実感しにくくなり、学習動機が減退することがあるが、初級の学生との関わりの中で、自身の日本語の学びの軌跡を実感することができる。第五に、「教えることは学ぶこと」(Thomson 1998)<sup>1</sup>と言われるように、教えるためには自身も勉強をし直さなければならない。このようにジュニア先生というプロジェクトは、自律的・持続的な学習のためにも有効であると考えられる。

## メンター

メンターは 2013 年から始まったプロジェクトである。メンターは、普段「先輩」と呼ばれ、中・上級の学習者(**Advanced-Professional, Professional, Advanced**)が原則二つ下のレベルの講義に参加し、**Lecture** の練習時の支援などを行うのが仕事である。プロジェクトの参加者は自分の所属クラスの成績に加算ポイントをもらうことができる。ジュニア先生とは異なり事前のミーティングなどは特に行われぬ。また、ジュニア先生は成績の良い学生が主な対象となるが、メンターは特に制限がなく、改めて下のコースの学習項目を学び直したい学生が誰でも参加できるため、ジュニア先生プロジェクトの利点をより多くの学生が受けることができる。

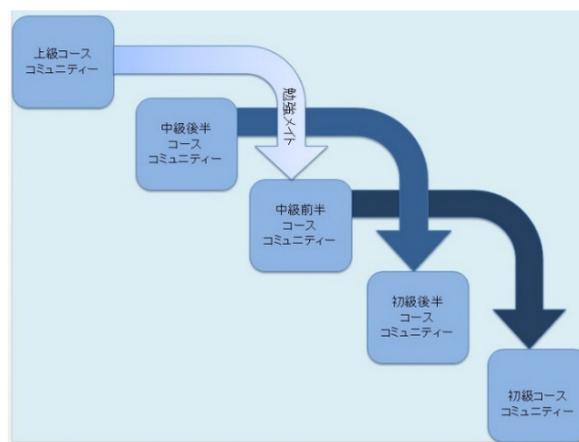


図 2 メンターのしくみ

<sup>1</sup> Thomson, C.K. (1998) “Junior Teacher Internship: Promoting Cooperative Interaction and Learner Autonomy in Foreign Language Classrooms”, *Foreign Language Annals*, 31:4: 569 – 583.

## Moodle

学習用に作られた UNSW の SNS である。授業ごとに Moodle ページが用意されており、課題提出、授業に関する情報揭示、Lecture に出られなかった学生のための Lecture の内容紹介、Lecture で紹介される歌のリクエスト、Capstone のグループの打ち合わせ、次回の授業のための Reading や課題などの提示、先生への質問等に使用されている。UNSW の公式ホームページ内にある“my UNSW”からログインして入ることができる。Moodle はオンライン上、授業時間外におけるコミュニティの結びつきにも役立っていると考えられる。

## クラス編成

	クラス	専任講師	非常勤講師
日本語	Introductory (A, B)	福井先生、橋本先生	中村先生、大浜先生
	Intermediate (A, B)	飯田先生	中村先生
	Advanced (A, B)	岡本先生	
	Professional (A, B)	橋本先生	
その他	Capstone	福井先生、トムソン先生	
	Culture	飯田先生	
	Writing Japanese	岡本先生	

## 3. 実習の内容

### 3.1 教壇実習

#### Introductory Japanese B

担当教官：福井先生、橋本先生、中村先生、大浜先生

実習生：金秀恵、唐姣姣

使用教材：『Nakama Book1 b』（教科書、ワークブック、コースノート）

担当コースについて

- ・1年生を中心とした日本語初級前半コース
- ・前学期に開講されていた Introductory Japanese A の続きとなる。
- ・学生は1週間の間に、Lecture2時間、Tutorial1時間、Seminar2時間の計5時間の授業を受ける。

#### 【Lecture】

- ・大講義室で文法事項の説明やドリル練習などを行う
- ・学生は150名以上
- ・Lectureの資料(パワーポイント)は毎週 Moodle にアップされ、学生が予習できるようになっており、講義の際にプリントアウト又は PC などを持ち込み手元に置いて講義を受ける。

### 【Tutorial, Seminar】

- ・Lecture で説明を受けた項目を文脈の中で使えるようにする、運用練習中心のクラス
- ・学生は各クラス 25 名程度

### 【実習について】

- ・教壇実習：水曜日の Tutorial (1 人 1 クラスずつ、2 回)、木曜日の Seminar (1 人 1 クラスずつ、1 回)
- ・授業参加：月曜日の Lecture には必ず参加し、午後は今週の教案について先生と打ち合わせをした。水曜日の Tutorial に備え、火曜日の Tutorial(1 クラス)にも参加し授業の流れや活動などを事前に確認した。水曜日には Tutorial、木曜日には Seminar の教壇実習を行った。

### Tutorial(教壇実習の内容)

Week	主なテーマ	実習生が行った内容 (時間は一人当たり)	
3	助詞・一番～		参加のみ
4	大きい数字、値段		参加のみ
5	数詞・洋服とアクセサリー	25 分	数詞、洋服とアクセサリー (きれいな〇〇です、赤い〇〇です、新しい〇〇です、～さんは何を着ていますか? etc.)
6	食べ物	25 分	宿題確認、単語の練習 (食べ物を説明することば)
7	家族	20 分	家族のよび方、家族についてインタビュー (何人家族ですか)
8		35 分	家族についてのリスニング、リーディング(読んで、家系図を書く)、スピーキング(グループ活動: リーディングで読んだ家族について他の人に紹介する)、漢字の練習
9	～て+いる人	40 分	文をつなげる練習、単語の意味の確認、テ形の練習、漢字の練習

・今回の実習生が担当させていただいたチュートリアルクラスには、学習者が 20～25 人程と福井先生と実習生(金、唐)の他に、UNSW の TA (大学院生のサリーさん) がいた。

・チュートリアルクラスでは漢字先生という制度があり、漢字学習の際に漢字圏の学生が漢字先生となり、非漢字圏の学生に漢字の書き方や意味について教えるというものである。クラスによるが大抵 1 人の漢字先生が 2～3 人の学生を見る。

## Seminar(教壇実習の内容)

Week	主なテーマ	ロールプレイ	実習生が行った内容 (時間は一人当たり)	
3	動詞・比較	好きなことと好きなもの		見学として1時間のみ参加
4	誕生日・お金があったら	ほしいもの、したいこと		授業の流れや雰囲気などを把握
5	買い物	デパートで買い物	40分	買い物場面における店員とお客の簡単な会話(値段を聞く)
6	誘う・レストラン	レストランで注文	40分	レストランの予備知識、食べ物や飲み物を決める会話、レストランで注文する練習
7	人の描写	～人	40分	着ているもの、外見(背が高い/低い、髪の特徴)について描写する。
8	家族の描写	～さんはどんな人ですか	40分(金)	アンケート:「～人はいますか」グループ(5~6人)内でみんなに聞いてみたい質問を作って調査し、その結果について話し合う。
			50分(唐)	自分の家族について描写するロールプレイ:「～さんはどんな人ですか」写真を用いて着ているもの、背、髪形などを描写する。
9	インターアクションテスト			タイムキーパー、録画、評価

- ・今回の実習生が担当させていただいたセミナーのクラスには、学習者が20~25人程と福井先生と実習生(金、唐)の他に、UNSWのTA(サリー)、Jr先生がいた。
- ・120分×2クラスのうち、Seminar前半のモデル会話の練習を一人一回ずつ担当した(出欠および宿題確認を除いた約40分)。最後のSeminar(Week8)では、担当部分を前半・後半に分けて一人二回ずつ行った。
- ・セミナーのクラスでは授業内でモデル会話の練習とロールプレイのための準備の時間があり、2人ずつペアでお互いのロールプレイを評価する方法がとられている。学生はもらった評価をもとに自分のパフォーマンスを上げるためのフィードバックを行う。または5~6人でグループを組んで様々な活動を行った。

★時間割(Introductory)

Introductory (金、唐)					
	月	火	水	木	金
9:00					
10:00	Introductory Lecture		Introductory Tutorial		
11:00			Introductory Tutorial	Introductory Seminar	
12:00					
13:00					
14:00		Introductory Tutorial	Introductory Tutorial	Introductory Seminar	
15:00					
16:00			Introductory Tutorial		

Intermediate Japanese B

担当教官：飯田先生、中村先生

使用教材：『Nakama 2』（教科書、ワークブック、コースノート）

担当コースについて

- ・2年生を中心とした日本語初中級クラス
- ・前学期に開講されていた Intermediate Japanese A の続きとなる。
- ・学生は1週間の間に、Lecture×1コマ、Tutorial×1コマ（4クラスに分かれる）を受講する。
- ・受講生の多くは1年時の Introductory から日本語学習を始めた学生で、日本語が主専攻の学生もいれば副専攻の学生も多い。先生方のお話では、このコースになると学習文型が多く難易度も上がるため、困難を示す学生の学習動機をいかに維持し持ち上げるかが課題であるとのことであった。ただ、グループワーク形式の学習形態に慣れている人が多く、教師の指示で期待以上の活動をしてくれ、真面目で熱心な学生が多いと感じた。

【Public Speech Project】

同プロジェクトは、選んだテーマに基づいて自分の経験・主張を織り交ぜたスピーチを作成し、クラス内で発表するという課題である。準備から発表まで1学期間かけて行い、第1～2週でトピック(留学、言語、アニメなど)を決め、同じトピックのグループで集まり内容を練る。第3～6週にドラフトを作成し、グループ内でピアレビューを行う。ドラフトはMoodle上に投稿し、担当教員の添削・コメントを受ける。実習生もこの作業に加わった。第7週に Interaction test というパネルセッション形式の中間報告会があり、学生は1分間でスピーチの内容、経過報告を行い、その場で他学生から質問やアドバイスを受ける。第9週には Professional クラスの学生が参加し、スピーチにアドバイス・コメントをしてもらいドラフトを完成させていく。その後第11週まで各自で発表練習を行う。その成果をビデオ撮影しMoodle上に投稿、他学生とピアレビューを行い、第12、13週のスピーチ発表会に向けて最終的な形に整えていく。

### 【Lecture】

- ・前半 1 時間は新しい学習項目についての講義で、実習生は講義内容や授業風景など気づいたことについてメモを取った。先生から「お茶大の皆さんはどうですか」「日本ではどうですか」といった質問があり、答えることもあった。
- ・毎回後半に練習プリントがあり、先輩学生と一緒に机間巡視し学生の質問に答えたりコメントをしたりした。

### 【Tutorial】

- ・第 2 週から実習に入った。
- ・今回の実習生は二人（閩、奥西）である。二人で前半と後半に分かれ実習に入ることもあったが、基本的には一クラスに一人が担当し実習に入った。
- ・教案は、前の週に次の週の教案について考え、先生からアドバイスをいただき、二人で、大まかな内容をデザインし、各自の授業において少し修正を加えた。具体的な内容は次の通りである。

#### 各週の実習内容と実習生の役割

Week	内容	実習生の役割
3	★文化習慣について ★～てあげる／もらう／くれる、～ところ、～たところ／～たばかり ★スピーチについて	自己紹介、授業や学生の様子を観察、机間巡視し、適宜学生からの質問に答える
4	★「～てあげる／くれる／もらう」の宿題の答え合わせ ★使役、間／間に	授業や学生の様子を観察、授業への参加、学生からの質問に答える、使役と許可をもらうの練習について 30 分ほど授業を行う
5	★近所迷惑 ★受身、使役受身	飯田先生の 2 つのクラスで 60 分の授業を担当
6	★近所迷惑、文句を言う ★～ようにする、～まま、～ても、～のに	飯田先生の 2 つのクラスで 60 分の授業を担当
7	★就職活動 ★Interaction Test	Interaction Test の手伝い
8	★就職活動、面接、履歴書 ★敬語（尊敬語、謙譲語、丁寧語）	飯田先生の 2 つのクラスで 120 分の授業を担当
9	★敬語 ★の、こと、～ことになる／～ことにする ★も	飯田先生の 2 つのクラスで 60 分の授業を担当

## 一週間の流れ

曜日	予定	振り返り	授業準備
月	Lecture		教案を頭に入れる、シミュレーション、（次週の実習についてプランを練る）
火	Tutorial①	Tutorial①の反省 ※1	
木			
水	Tutorial②	Tutorial②の反省 ※1	次週の教案作成開始 ※2
金	全体 Meeting	1週間の振り返り、次週の目標	次週の教案作成 教案をメールで提出（フィードバックをもらう）

※1 先生からフィードバックをいただき、実習生二人でお互いへのフィードバックも行った。

※2 教案を作る際には、先生から次週の授業内容をいただき、それについて実習生二人で案を考えた。授業内容に合わせて活動をデザインしたり、授業が盛り上がるように問いかけを工夫したり、ゲーム形式のタスクを設けた。できた教案は先生にチェックしていただき、フィードバックを受け適宜修正を加えた。

## ★時間割(Intermediate)

Intermediate (奥西、閏)					
	月	火	水	木	金
9:00					
10:00		Intermediate		Intermediate	
11:00		Tutorial	Intermediate	Tutorial	
12:00			Tutorial		
13:00	Intermediate	Intermediate			
14:00	Lecture	Tutorial			
15:00					
16:00					
17:00					

## Advanced Japanese B

担当教官：岡本先生

実習生：八木友香里、何佳容

使用教材：主教材『上級へのとびら』、副教材『上級へのとびらーきたえよう漢字力：上級へつなげる基礎漢字 800』『上級へのとびらーこれで身につく文法力』

### 【Lecture (120分)】

70名ほどを対象とする講義式授業。主教材の読解文と関連したテーマのプレゼンテーションを通して予備知識を学ぶ。また、新しい関連文型や語彙を導入し、簡単な練習文を作る。授業の始めには、前の週の練習文のフィードバックを行う。その他に、クラスごとに持ち回りで学生が作った練習問題も行う。前の週に学んだ文型を使った文の発表と意味の確認（文法の練習）、ディクテーション（書き取り練習）、漢字のワークシート（漢字の練習）の3つがある。また、日本の歌を毎週1曲学生が紹介する時間もある。

### 【Tutorial (120分)】

25名ほどを対象とし、読解及び文型・話題の応用活動を中心とする授業。

### 【その他、評価に関わる活動】

・プロジェクトA：(食ベログプロジェクト)：シドニーにあるレストランに行き、ウェブ上の食ベログと口頭発表にて紹介するグループ活動。この時期に来校する東北大学の学生を含め4名前後のグループを作り、計画・取材・ウェブ上の食ベログページの作成、発表、評価までを1学期間かけて行う。日本人学生との協働学習活動を通して、より実践的な日本語応用能力を身につける。

・プロジェクトB：スピーチコンテスト出場、ボランティア、2年生の講義のヘルパー、授業の日直(Tutorialでリーダーとして動いたり、クラス内で作成した練習教材をまとめて先生に送ったりする係)など、日本語を使う学内外の活動をいくつか選び参加することにより、日本文化・社会などの理解を深めながら日本語能力を向上させる。

・インターアクションテスト：Week9に一度実施。テキスト第9課で学んだ教育のテーマに基づき、学生2名、教師1名、計3人で会話を展開する。その中には別の課で学んだ「褒める」「褒められる」のやり取りも含まれ、言語・非言語行動が評価対象となる。

授業及び実習内容

Week	講義内容	チュートリアルの内容	実習生の取り組み
3	<p>&lt;第6課後半と第7課&gt; 先週の文法フィードバック 今週の文法の導入 ・L6-15,16 L7-1,2 迷信と縁起 今週の歌</p>	<p>・宿題チェック ・講義活動の準備 ・食べログプロジェクトの準備 (東北大生へのメール作成)</p>	<p>Lecture と Tutorial を見学</p>
4	<p>&lt;第7課日本のポップカルチャー&gt; 先週の文法フィードバック 今週の文法の導入 ・L7-3,4,8,10,11 学生による練習 ・書き取り練習 今週の歌</p>	<p>・プロジェクトBの連絡 ・食べログプロジェクトの確認 ・宿題チェック ・講義活動の準備 &lt;第7課日本のポップカルチャー&gt; ・読解練習「漫画の神様」</p>	<p>Lecture と Tutorial を見学 来週のLectureの始めの文法フィードバックを準備</p>
5	<p>&lt;第7課日本のポップカルチャー&gt; 先週の文法フィードバック 今週の文法の導入 ・L7-12,13,14,15 オノマトペ 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌</p>	<p>・食べログプロジェクトの確認 ・プロジェクトBの多読リーディングナイトの連絡 ・宿題チェック ・講義活動の準備 &lt;第7課日本のポップカルチャー&gt; ・オノマトペの練習(教科書160ページ) ・会話練習とロールプレイ(困った状況を説明する/苦情や不平を言う)</p>	<p>Lecture は、始めの文法フィードバックを担当。 Tutorial は確認と連絡事項以外を担当。</p>
6	<p>&lt;第9課日本の教育&gt; 先週の文法フィードバック 先週の文法の復習と今週の文法の導入 ・L7-12,13,14,15&amp;L9-1 日本の教育について 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌 東北大学の学生と会う</p>	<p>・食べログプロジェクトの確認 ・インターアクションテストのパートナーを決める ・宿題チェック ・講義活動の準備 &lt;第9課日本の教育&gt; ・UNSWの学生の教育について話す ・「読み物」前半 内容確認</p>	<p>Lecture は、始めの文法フィードバックを担当。 Tutorial は全てを担当。</p>

7	先週の文法フィードバック ＜第9課日本の教育＞ ほめる・ほめられる 文法ノート L9-4,6,7,9,10 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌	・食べログプロジェクトの 確認 ・インターアクションテスト の連絡 ・宿題チェック ・講義活動の準備 ＜第9課日本の教育＞ ・「読み物」内容確認 ・ディスカッション	Lecture は、始めの文法フィードバックを担当。 Tutorial は全てを担当。
8	先週の文法フィードバック ＜第9課日本の教育＞ 日本人のジェスチャー 文法ノート L9- 11,13,14,15,16,17 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌	・食べログプロジェクトの 確認 ・宿題チェック ・講義活動の準備 ＜第9課日本の教育＞ ・会話文4 ・教育についてのディスカ ッション ・インターアクションテスト の練習	Lecture は、始めの文法フィードバックを担当。 Tutorial は全てを担当。
9	食べログ発表	インターアクションテスト	Lecture では食べログ発表の 評価、Tutorial ではインタ ーアクションテストの Japanese Speaker 役、及び 評価者として参加

★時間割(Advanced)

Intermediate (八木、何)					
	月	火	水	木	金
9:00					
10:00			Advanced	Advanced	
11:00	Advanced		Tutorial	Tutorial	
12:00	Lecture				
13:00			Advanced		
14:00			Tutorial		
15:00					
16:00					
17:00					

## Professional Japanese B

担当教官：橋本友見子先生

使用教材：特定の教材はなし

- ・3年生を中心とした日本語上級コース
- ・前学期に開講されていた **Professional Japanese A** の続きとなる。
- ・学生は1週間の間に、**Lecture1** 時間、**Tutorial2** 時間の計3時間の授業を受ける。
- ・授業のコンセプトは「自分の日本語に向き合う」「日本語を使う」
- ・授業は全て日本語で行われる

### 【Lecture】

- ・シアター教室でテーマに関わる動画を見たり、先生の説明を聞いたりアンケートに答えたりする。
- ・学生は29名
- ・**Lecture** の資料は毎週 **Moodle** にアップされ、学生が予習できるようになっており、講義の際にプリントアウト又は **PC** などを持ち込み手元に置いて講義を受ける。

### 【Tutorial】

- ・中くらいの教室で行われる。**Lecture** で書いてもらった意見をみんなで共有したり、ディスカッションしたりするクラス
- ・11時からのクラスは20名、14時からのクラスは9名

### 【実習について】

- ・月曜日の **Lecture** では毎回学生が先生から出されたアンケートに答えるので、それを回収して出席確認し、面白かった意見などをまとめて **Tutorial** で紹介をしたり、テーマに関わるプレゼンを行ったりした。
- ・プロジェクトで「日本人と対話」を選んだ学生用の対話ルーブリック評価表を作成した。

### 【その他、評価に関わる活動】

- ・色々プロジェクト：「スピーチコンテスト出場」「先輩先生」「日本祭りのスタッフ」「国際交流基金 ビデオまつりへの応募」「日本人と対話」「**Introductory** クラスの日本語劇への参加」などから一つを選び、自分の日本語力向上や日本語を使うために取り組む課題。プロジェクトによって点数が異なり、また、レポートを提出するものもある。
- ・日本語研究：日本語についてテーマ(e.g. 「敬語」「若者言葉」「四字熟語」「助詞」など)を各自決め、**Professional** クラス、**Intermediate** クラス、**Week9** に行うビクターセッションでの日本人インタビュー通じて研究していき、学期末に発表する。

## Schedule

Week	主なテーマ	Lecture 内容	Tutorial 内容	実習生の取り組み
3	敬語	動画を観る 意見交換	読解「ジェフの話」	アクティビティへの参加
4	ひらがな カタカナ 漢字	・ひらがな・カタカナ抜き打ちテスト <アンケート> 漢字で難しいと思うこと/勉強法について	・漢字の勉強法についての意見交換 ・漢字の組み合わせについて考える	・学生たちが書いたひらがな・カタカナをチェックし、学生たちの癖や字について発表 ・アンケートをまとめたものを発表
5	ひらがな カタカナ 漢字	<アンケート> 漢字だけで長い言葉を作ろう	・グループ対抗漢字カードゲーム ・漢字がどうやって作られたか考える	・学生たちが書いた漢字言葉から、面白かったものや長かったものを発表
6	オノマトペ	英語と日本語を比べる <アンケート> ・好きな/面白いオノマトペ ・好きな食べ物とそれに合うオノマトペ	オノマトペについての動画を観る	・アンケート集計 ・面白い意見を発表
7	試験 日本語研究	学期末試験	・試験解説	・試験の採点 ・試験解説のプレゼン ・日本語研究の計画書チェック
8	日本語研究	インタビュー準備	お茶大実習生(何さん・閔さん)へインタビュー	・インタビュー作成の手伝い ・インタビューの手伝い
9	日本語研究	同級生(Professionalクラス)にインタビュー	日本人ビジターセッション	・インタビュー作成の手伝い ・ビジターセッションの運営

★時間割(Professional)

Professional (清水)					
	月	火	水	木	金
9:00					
10:00					
11:00				Professional Tutorial	
12:00	Professional Lecture				
13:00					
14:00				Professional Tutorial	
15:00					
16:00					
17:00					

**Capstone**

担当：トムソン先生、福井先生

位置づけ：日本語コースを修了する学生の「集大成」

参加学生：日本語コースを専攻する3～5年生

Week	主な活動	実習生が行った内容
2	テーマ決め/係決め	テーマ決めのサポート
3	テーマについて発表	発表内容への質問、コメント
4	Japan Foundation Sydney の図書館見学	話し合いサポート
5	グループ話し合い	話し合いのサポート (サポーターの所属グループ発表)
6	全体の係り決め	発表内容への質問、コメント／お茶の準備
7	中間発表	話し合いのサポート
8	グループ話し合い／写真撮影	話し合いのサポート
9	グループ話し合い	話し合いのサポート

・この授業では、40名程度の日本語コースを専攻する学生が受講しており、これまでの日本語コースの集大成として、研究発表会を開催するというプロジェクトに取り組む。この研究発表会は学校外から日本人のお客様を招待することになっている。発表会の運営は学生が中心となっていく。

・学生は教員が決めたグループごとに研究テーマを決定し、授業内外の時間を使って話し合いやリサーチ、発表準備を行う。

・Capstoneには、学習者40名と先生方、私たち実習生の他に、UNSWの実習生、お茶の水女子大学の実習生、先輩である大学院生がサポーターとして参加した。

### 3.2 他のクラスへの見学について

実習期間の最初の約一週間は、担当のクラスを決めるために全てのクラスの見学をした。また、決定後もスケジュールが合えば積極的に他のクラスに見学に行った。見学に際しては担当の先生への事前連絡が必須である。遅くとも前日までに参加を希望する授業のコマ、見学者名をメールで連絡し、承諾を得る。多くの授業では、学生の様子を見て回ったり、練習相手になったりなど積極的な参加を求められる。ただ見学するのではなく、意見を求められた際にも答えられるよう、コミュニティの一員であることを常に意識することが大切である。その他、他クラスからの依頼を受けてテストの採点やグループワークへの参加、インターアクションテストの運営（ビデオ撮影、タイムキーパー等）を行った。



## 4. その他の活動

### 金曜ミーティング

実習中に毎週金曜日の授業後に(17:00~18:00)、福井先生とトムソン先生をはじめ UNSW の日本語教育の先生方とサリーさん(UNSW の大学院生で **Introductory** クラスの **Jr.**先生)、実習生全員で反省会兼ミーティングを行った。レベルごとにこれまでの一週間の振り返りをし、反省点と残る課題を報告した上で、前の週に設定した目標の達成度と次週への目標も踏まえて、レベルを超えた意見交換の場であった。先生方からご意見をいただいたり、実習生同士から新たなアイデア・ピア評価をもらったりできる貴重な機会であった。それ以外に、実習中に新たな発見、教師としての信念、言語教育観などに関する自分の意見をみんなでシェアすることにより、教壇実習を超え、個人の教育理念の深いところまでも共有することができ、多くの学びと刺激を得た。

### 訪問先

実習期間中、UNSW 以外の機関へも訪問した。特に年少者を対象とする第二言語教育とバイリンガル教育の現場に見学することにより、知見を広げることができた。今年訪問したのは①North Sydney Girls High School②Murray Farm Public School の二か所である。

#### ①North Sydney Girls High School

- ・訪問日：8月16日(火)
- ・7~12年生が通う公立女子校。言語科目は **Heritage** コースか第二外国語コースで学ぶことができ、**French, German, Japanese, Latin, Mandarin** の中から選択できる。同じ女子校なので、今回私たち実習生がまずお茶の水女子大学を簡単に紹介してから、日本の女子高生をトピックにし、1日の生活、制服、カバンの中身、**JK** 言葉という四つのサブトピックについて発表した。そして向こうの学生たちと言語学習、卒業した後の進路、日本の生活など、彼女たちが興味深い内容について話し合った。

- ・コンタクト：トムソン先生の紹介で、溝尻サリー先生とコンタクト

<http://www.northsydgi-h.schools.nsw.edu.au/>

#### ②Murray Farm Public School

- ・訪問日：9月6日(火)
- ・2010年度から日本語バイリンガル教育プログラムを実施している公立小学校。日本語を授業言語として、音楽と美術、理科等の内容を学んでいる。日本語の授業は週二回くらいの割合で日本語のネイティブスピーカーにより行われる。また、ほとんどの授業が担任の先生とアシスタントのチームティーチングで行われる。今回の訪問は実習生全員を二つのグループに分けて、朝 8:50 から午後 2:45 までの間、幼稚園から六年生までそれぞれのクラスを見学した。

- ・コンタクト：トムソン先生の紹介で、竹井真弓先生とコンタクト

<http://www.murrayfarm-p.schools.nsw.edu.au/>

#### ※訪問の際の留意点

- ・できるだけ早い段階で訪問したい機関、全員が共通して空いている時間(もしくは空けられる時間)を決めておくこと
- ・お土産を準備しておくこと
- ・子どもの写真を撮らないこと

## トムソン先生勉強会

実習中に毎週水曜日の 16:00~18:00 に、トムソン先生のゼミ生(大学院生)を中心に週一回自主的に行っている勉強会。各自の研究進捗を報告したり、全員が関心を持って理論と文献について議論したり、または学会発表のリハーサルをしたりする。実習生が研究計画書を発表することもあった。皆さんから貴重な意見をいただいた。

## セミナー等への参加

### ①日本語教育シンポジウム「社会・コミュニティとつながることばと教育」

・開催日&場所：9月3日（土）国際交流基金シドニー日本文化センター  
・「人とつながる、社会とつながる日本語教育」をテーマに、海外の日本語教育界の第一線で活躍なさっている先生方から、現場での実践活動を交えながら社会・コミュニティにおいて人々はどのように日常言語を使っているか、それをふまえた言語教育とはどのようなものであるべきか、というお話を聞くことができた。語学教師はただことばを教えればいいのか？という疑問から始まり、人や社会とつながるためにことばがあるということ、そうした境界を超えた中で交わされることばの流動性・混濁性について考えさせられた。

### ②マルチリンガリズムについてのセミナー “Constructing the Ideal Citizen-Speaker as Monolingual? Language as Site of Struggle in Multilingual Luxembourg”

・開催日&場所：8月11日（木）シドニー大学  
・Sheffield 大学の Horner 先生のご講演。氏はルクセンブルクをフィールドに調査する数少ない研究者で、今回のセミナーはルクセンブルクの複言語状況に関するお話だった。国の3言語主義政策（ルクセンブルク語、仏語、独語）、3言語を超えた多言語状況（学習言語としての英語、外国人住民の言語）、人々の言語アイデンティティなど、当地の複雑な言語状況が語られ、大変興味深い内容だった。小規模なセミナーだったが、参加者との距離が近く闊達な意見交換がなされ、参加者側から発せられたコメントも示唆に富み非常に面白かった。

### ③佐藤慎司先生の日本語クラス特別授業

・開催日&場所：9月5日（月）シドニー工科大学  
・シドニー工科大学で開講されている上級日本語クラス “Japanese Language and Identity” で、今回プリンストン大学の佐藤先生が特別授業を行うということで、尾辻先生、昭子先生のご好意によりお茶大生も数名参加させていただいた。佐藤先生からは社会参加をめざした言語教育のあり方についてお話があり、先生のお人柄があふれとても熱のこもったレクチャーだった。4、5人グループに入り、現地の学生と「普段、誰と、どんな言語を使っているか、それらをどのように使い分けているか？」「“言語能力”とは何か？」についてディスカッションをし、異なる背景を持った者同士がさまざまなレポトリーを使って語り合うことを実体験したことは非常に有意義な体験である。

## 5. 事前学習

### 5.1 日本語教育学実習（2016年度／前期木曜日7,8限）

本授業は、海外教育実習に向けて事前の課題発見や授業の組み立ての基礎を学ぶ機会として位置付けられる。実習に参加する人、特に指導経験のない人は必ずこの授業を受けることにしている。実習に参加する大学院生、特に経験が無い学生は「日本語教育実習」の履修が必須である。この情報は、科目名を含め今年度のものであり、来年度以降変更される可能性もある。

#### 本授業の概要と主な目的

本授業は、日本語教育の現場で必要とされる基礎的な内容を学ぶことを目的としている。授業参加者は指導経験が無い学生がほとんどであった。また、受講生には海外教育実習に参加しない学生も含まれており、10名程度が本授業を履修していた。

以上を踏まえ、本授業の主な目的を2016年度のシラバスより引用する。

- ・主な教授法の特徴を知る。さらに、教材分析、シラバス作成、教案作成、模擬授業、リフレクションなどを行い、日本語教師としての基本を身につける。また、これらを通し、夏休みのオーストラリア実習に向けて国内での準備を始める。
- ・グループ活動を通じて、参加者自らが積極的にクラスを作り上げていく。
- ・目に見えない作業、学習者のあり方をできる限り想像し、実践の全体像をつかむ。そのうえで、個別の作業を具体化する。
- ・準備からリフレクションまでを通し、教師として「考える」姿勢を深める。

#### 内容

半期15回で、講義は以下の二つから構成されていた。

##### ①座学

…学習者や教材について、それぞれの特徴について考える。教案は何に留意して書けばいいかを考える。

##### ②模擬実習(日本文化紹介(と授業案)1回、実習2回)

###### …日本文化紹介の授業案

1人1つずつ紹介する日本文化を選び、文化紹介を含む1回分の授業計画を立てる。実演は日本文化紹介にあたる部分のみ。

###### …模擬実習2回

2人のグループで30～60分程度の模擬実習を行う。発表担当グループは、担当教員から事前に教案について指導を受ける。学習者役は、残りの受講生が担い、模擬実習評価表を記入し、良い点や改善を要する点、質問や疑問点についてコメントする。模擬実習の様子はTAが録画し、受講生にメールで配信する。データを受け取った発表者は、課題点となる部分の文字起こしを行い、改善案をレポートとして記述、提出した。

(詳細は下記授業計画参照 (シラバスより引用、[ ] は報告書執筆者加筆))

	日付	主な内容
1	4月14日	・オリエンテーション ・過去の「授業」を振り返る
2	4月21日	・「学習者」を知る (学習者のニーズ分析)
3	4月28日	・「日本語教科書」を知る [教材研究]
4	5月12日	・初級クラスに藤蔵する文型 [教材研究]
5	5月19日	・日本文化紹介レッスン [ミニ実習]
6	5月26日	・前回のフィードバック、ティーチングプラン、教案作成
7	6月2日	・ティーチングプラン、教案発表 (1)
8	6月9日	・ティーチングプラン、教案発表 (2)
9	6月16日	・模擬授業 (1)
10	6月23日	・模擬授業 (1)
11	6月30日	・模擬授業 (1)
12	7月7日	・模擬授業 (2)
13	7月14日	・模擬授業 (2)
14	7月21日	・模擬授業 (2)
15	7月28日	・模擬授業 (2)

### 海外教育実習との相違点

日本語教育実習で経験する模擬授業と海外教育実習で行う授業は、環境・受講生・クラスの数などのような点で違いが見られる。海外教育実習に参加する履修者は以下の点を考慮し、できる限り UNSW の学生を意識しながら模擬授業に臨む必要がある。

受講生：日本語初級～上級レベル

クラスの数：20～35人程度

授業時間：20分～120分 (1人での担当時間)

授業担当：授業を担当する実習生、実習生担当の教員、TA、Jr.先生等

教案：主に自分が担当するクラスの指導先生に相談して改善・修正を行う。

特に各レベルによって授業の目的、活動が異なっているので、自分が担当するクラスの特徴や雰囲気などをよく把握することが必要であると思われる。例えば、初級の場合学習者の既知語を考慮して教案を作るように気を付けた。

そして、教案作りは一人ではなく実習パートナー、他のレベルの実習生と意見を交わし充実した授業内容になるように努力した。

## 5.2. 事前指導

ここではUNSWの日本語教育の理念を理解することを目的に行われた事前学習について報告する。

### 定例ミーティング

毎週木曜日のお昼時間（12:10-1:20）を利用し実習生が集まって森山先生から事前指導を受けた。主な内容は、UNSWの日本語コースで採用されている概念の整理と当該コースの分析を行い、社会文化理論、学習者オートノミー、学習者コミュニティ、教師養成、学習環境のデザインというキーワードを中心に理解を深めた。そして、オーストラリアでの生活および手続きなどについて不安な点、心配な点を伺うことができた。渡航前に先生の指導を頂いたことで、実習先の雰囲気をもっと具体的にイメージ化することができた。

#### 【事前に読んだ文献リスト】

- ①トムソン木下千尋（2007）「学習環境をデザインする—学習者コミュニティとしての日本語教師養成コース—」,『世界の日本語教育』17,p.169-185.
- ②トムソン木下千尋（2009）『学習者主体の日本語教育：オーストラリアの実践研究』（日本語教育学研究1）ココ出版
- ③トムソン木下千尋（2010）「オーストラリアの日本語学習者像を探る」『オーストラリア研究紀要』36,p.157-170





# 【Part 2】 手続きと生活

## 1. 手続きと生活

### 1.1 手続き

シドニー到着後、大学内のインターネットやパソコンが使えるパスワードを取得する手続きを行う。それについて以下で説明する。

大学で学生証を受け取った後、大学内のインターネットやパソコンを使うためのパスワードを取得する。学内のパソコンやネット環境の窓口(アシスタントカウンター)へ学生証を持っていき、設定してほしいパスワード(数字、大文字、小文字が入ったもの)をアシスタントに伝え、設定してもらう。このパスワードで大学内の無線 LAN、パソコンの利用や、学内サイトのアクセスができる。

また、担当レベルによって、授業で先生と学生が情報を共有できるネットサービス(Moodle)が使用されている。このページには先生が授業の教材をアップロードしたり、学生が宿題を提出したり、イベントや授業についてのコメントを投稿したりする。実習生もそれぞれのクラスの Moodle に追加させていただいた。追加手続きは各授業の教師により行われるが、時間がかかるため、初日に確認しておいた方が良い。

実習中、問題や質問がある場合は、Global Education Office に尋ねると良い。

#### 【実習生控室】

大学で、実習生が使用できる部屋を一部貸していただいた。この部屋は UNSW の研究員や院生が使う部屋で、パソコンが置いてあり、印刷もできるようになっている。印刷やコピーは印刷室でできるが、印刷の設定が必要である。設定の仕方は担当先生に教えていただいた。

### 1.2 生活の知恵

#### 【お金編】

- ・実際使ったお金は(クレジット込)約 15 万円だった
- ・外食は非常にお金がかかるため、寮で自分たちで作るのがおすすめ

#### 【バス利用編】

- ・メインの交通機関はバスだった
  - ・ほぼ全ての公共交通機関で利用できる便利でお得な IC カード⇒OPAL カード  
日曜日はどれだけ乗っても \$ 2.50/1 日
- ※・「次は△△△です」などアナウンスはないので、前もってどこで降りるのかを確認したり、運転手さんについたら教えてもらったりした方がいい
- ・日が暮れるのが早い時期(8 月は早め)は、目印にしている風景が分かりづらくなるので、気を付けて！

#### 【スーパー編】

- ・多くは Coles で買っていた。毎週水曜日に割引をしてくれる。(大学裏少し歩いたところ、寮から 30 分ほど)
- ・アジア系もの、卵は東京スーパーへ(Anzac Parade 沿い、寮を出てシティと反対方向に 5 分弱)
- ・物価が高いので、食べ物も高いです。特に魚・肉は日本で十分に食べつくしてきた方が良い

### 【思い出編】

#### <おすすめの場所>

- ・ Park 系はどこも非常に素敵
- ・ Manly Beach 天気が良い日にぜひ行ってみてください

#### <おすすめの食べ物>

- ・ キウイフルーツが美味だった
- ・ bills のパンケーキも美味しかった
- ・ チャイナタウンの麻辣香鍋がおすすめ

### 【寮での暮らし】

#### <部屋にあるもの、ないもの>

- ・ シャワー、キッチン(コンロ、レンジ、お湯を沸かすポット)、エアコンはあるが、ドライヤー、炊飯器、ざる、計量カップ、加湿器はない
- ・ 洗濯は、1 ドルで使える洗濯機が上の階にある(8:00~20:00)  
各部屋に、物干し台がある。乾燥機もあるけど使うと縮むらしい

#### <寮内でのネット使用>

- ・ 各部屋、15GB/月

### 【ホテルでの暮らし(ホテル名 : Y Hotel Hyde Park)】

#### <部屋にあるもの、ないもの>

- ・ シャワー、ドライヤー、お湯を沸かすやつ、エアコン、テレビ、冷蔵庫はあるが、スリッパ、洗濯物を干す場所・道具はない
- ・ 共用キッチンはあり、電子レンジ、冷蔵庫、お湯を提供してくれる。しかし、包丁や茶碗などの用品は各自で買う

#### <食事>

- ・ ホテルは朝ごはんを提供してくれ、しかも食べ放題(シリアル、食パン、牛乳、ジュースなどがある)
- ・ ガスやコンロがないため、電子レンジでご飯が炊けるグッズを持っていたほうが良い

#### <交通>

- ・ ホテルから学校まで 20 分ほどかかる。バス代は往復約 6 ドル
- ・ ホテルはシティにあるので、交通が非常に便利
- ・ 隣の Hyde Park も非常に綺麗で、散策する際におすすめ

### 【8,9 月のシドニー】

#### <気温>

- ・ 昼夜の寒暖差が激しい。常に上着はあったほうが良い
- ・ 8 月は暖かめの上着(コート、ダウン)が必要
- ・ 9 月は、私たちが行ったときは若干暖かったようで、昼は 30 度に迫る日もあった

#### <天気>

- ・ 基本晴れている。寒い風は若干強めだった

#### <乾燥>

- ・ シドニーの冬は日本の冬以上に乾燥している
- ・ 洗濯物を干したり、加湿器をつけたり、クリーム塗ったりして乾燥から身を守る

## 実習を通して学んだこと

< 閏暁哈 >

### 1. 実習の成果

UNSW での実習は短い 7 週間で、あっという間に終わったような気がした。いろいろ苦勞したが、皆で協力し合って何とか乗り越えた。たくさんの勉強にもなった。人生の貴重な体験だと思う。

8 月 5 日に到着してすぐに、授業に参加させていただいたが、初日なので何もわからないまま、そわそわしながら授業を聞いていた。そのときは教えた経験もなく、UNSW での日本語教育システムへの理解はまだまいちだった。そして、7 週間の実習生活を送り、堂々と教壇に立つことができた。また、日本語を教えることに対して自分なりの理解も生まれたと思う。学生を主体にして、ふさわしい教育方法で授業をやることの大切さを感じた。それに、協働学習の意義と役割も分かるようになった。学生間の協働だけではなく、教える方も良く助け合い、たくさんの案を作り出し、お互いへのフィードバックも役立った。今回はいつも二人で教案を作っており、チームワークの大切さを実感した。

### 2. 今後の課題

毎回の授業では、時間の割り方の難しさを良く感じた。特にそれぞれの Tutorial クラスの学生の性格とクラス内の雰囲気も異なるので、授業のペースが違ってくる。学生を理解し、時間通りに授業内容をカバーすることに努力することが必要になってくる。また、改めて学生を主体にして授業をやることの大切さを感じた。

### 3. 今後に向けて

今回は UNSW の先生方からたくさんのアドバイスをいただき、教育現場でのスキルも教えていただいた。今後はその経験を整理し、他の教育現場で生かしていきたい。それに、教室で教えることの難しさを知ったので、これからは自分をもっと鍛えるように頑張る。



## <奥西麻衣子>

### 1. 実習の成果

今回の実習は、教育経験者が参加する意味があるのかどうか、また、2ヶ月間離れることにより研究計画が遅れてしまうのではないかとこのころがあり、参加するかどうか迷った。それでもこのプログラムに興味を持ったのは、UNSW 日本語コースが進めている学習者主体の教育実践をこの目で見て体験したかったからだ。「教師主導型から学習者主導型へ」「受動的な学習から能動的な学習へ」といった文言はよく耳にするものの、その中で教師・学生が立ち回る姿があまり想像できないでいた。だから、学習者主体という概念が実際の教育現場でどのように実践され、その中で学習者側はどのように受け止めているかを知りたいと思った。そして、自分の教師活動に役立てたいというのが今回の参加の理由であり、目標である。

実習の成果は思った以上に大きく、また、毎日発見の連続だった。まず、UNSWで行われている日本語教育は、学習者主体と実践共同体の概念があらゆる活動の核にあり、それが機能するように入念にデザインされている点である。例えば、Intermediateクラスでは、スピーチ課題の中にピア活動がこまめに入り、学生は仲間の支援を受けながら完成させていく。教師は手取り足取り教えるのではなく、活動が円滑に進むように適宜支援をする。こうしたサポートがあるからこそ、学生は自分の力で大きな試練を乗り越えることができるのだと実感した。また、教壇実習からも学んだことがある。初回の授業は学生に問いかけても静まり返り、思い描いた活動ができずうまくいかなかった。そこで先生から言われたことは、「教師の説明は最小限にしグループ活動に時間をかける」「学生一人一人をよく見て、よく知る」ということだった。その時受けたショックは大きく、それからは学生一人一人について、何を考え、何をしているのかを観察し、授業を行うようにした。すると、反応がないと思っていた学生が実はぼそぼそと答えていたり、学生同士で話し合っていて取り組んでいたりと、それまで見えなかった光景が立ち現れた。

実習を通して感じたのは、人は一人ではコミュニケーションができないし、多くのことを学ぶことはできないということだ。UNSWの学生たちは目の前にある壁を自分一人の力だけでなく多くの人の手を借りることによって飛び越えて行く。私たち実習生もそうだった。実習に参加した7人で背中を押し合ったからこそ、それぞれの課題をクリアすることができ、一人ではできない学びを得ることができた。

### 2. 今後の課題

今回の実習から、自分の行動の指針となる教育的価値観が得られたが、それをどう実践に移すか、具体的な術はわからない。また、そうした価値観や方法を持っていても、学習者や教師仲間から理解が得られるとは限らない。UNSWの先生方が、「ここでうまくいったことが、他でうまくいくとは限らない。それぞれの現場、学習者に応じたやり方がある。それを見つけていくことが大切」とおっしゃっていたように、模索して、探求し、築いていかなければならないことだろう。

### 3. 今後に向けて

実習を通じて、「学び、成長し続ける教師」でありたいという気持ちがより強くなった。また、日本語を一言語手段として使い人・社会とつながることを目指した実践的な日本語教育の方法を仲間と探求し続けたいと思う。

## <何佳容>

### 1. 実習の成果

実習に参加する前、模擬授業以外に、日本語を教える経験がなかった。今回の教育実習に参加することにより、大変勉強になった。特に **Advanced** レベルを担当する岡本先生がいつも支えてくださり、また日本語教師の経験が長い八木さんとチームティーチングのおかげで、教える技法の模索と仲間意識の育成に新しい刺激を受けた。

例えば、次回の講義で、学習者たちが書いた短文についてのフィードバックのため、毎週パワーポイントを作った。項目の選択は適切か、わかりやすいパワーポイントで焦点を絞ったか、説明する時の言葉遣いが相応しいかなど、教材分析をした上で、八木さんと何度も相談しながら、二人で協力して作った。作り上げたパワーポイントを岡本先生に送り、また先生から丁寧なコメントをいただいた。細かいところから(例えば、助詞の付け加る・訂正とか、スライドのアニメーションの順番の入れ替わりとか)全体的なコメントまで(例えば、まとまりが弱い私たちのパワーポイントに対して、岡本先生が「いくつかのポイントに絞り、それぞれのポイントをクリアに指摘、それを練習(そのポイントについて、エラーをした学生を提示したり、簡単な練習をしたり)して、定着させるといい」というアドバイスをいただいた)、丁寧なご指導をくださった。初めての教壇経験だったので、このような基本的なところまで、岡本先生のご指導の下、八木さんと一緒にしっかりとやってみたことで、教える技法を磨いただけではなく、様々なところまで工夫しなければならないという心構えも学んだ。また、同じ日本語学習者の立場から、自分自身の日本語学習経験を活かしながら、より良い授業活動のデザインを提案することもあった。このように、メンバーそれぞれの長所を活かし、目標に向けてお互いに支えてあって一緒に頑張ったことにより、仲間の間には今までないほど高い信頼性が養われたと実感した。

### 2. 今後の課題

UNSW の日本語教育は学習者の主体性を大事にすると実感した。**Introductory** から **Capstone** まで、それぞれのレベルに応じ、学習者が主導する様々な活動を設けている。また、外国語環境というハンディにもかかわらず、クラス、学校の境界線を超え、実際に日本語と接触するチャンスを提供することで、学習者の言語学習に対する興味を引き出している。なお、自分にとって、この経験をどこまで、どうやって他の環境にも生かすかが今後の課題だと思う。

また、自分の日本語能力を上達させると同時に、まだ経験不足の自分がこれから授業に関する技法の習得を重ねていくことも今後の重要な課題だと考える。

### 3. 今後に向けて

まずは今回の教育実習の振り返りを記述するティーチング・ポートフォリオを作成することである。今回が初めての教壇に立ったのでまだまだ経験不足だが、自分にとって非常に有意義な実習だったと思う。この経験を振り返るために、ティーチング・ポートフォリオを作成することで、自己省察に基づく教育改善と教育活動の可視化により、教師としての自分の経験を重ねていく道を記録することができる。また、今回の教育実習のおかげで養うことができた仲間意識・繋がりをこれからも発展させ続けるように日々から様々な形で努力する(例えば、UNSW から戻ってから、実習生同士を主体として勉強会を行っている。今後はこの枠組みを超え、より多くのメンバーを招待することなども考えている)。

## <金秀惠>

### 1. 実習の成果

以前日本語教育コースの授業の一環として韓国（同徳女子大学）で三日間にわたって教壇実習を行ったことがあったが、今回 UNSW では7週間という長い期間、そして初級学習者を対象に行われたのははじめてである。

実習の前後大きく変わったのは、「教師の役割」について改めて考えるようになったことである。実習をしながら自分が思っていた教師像は、授業は必ず教師が中心にいる、教壇に立ってただ知識を伝える存在であると認識していたことに気付いた。そして、教案を作る際にも以前は文法項目の形のみに注目していた。実習を重ねることで、教師は自分の知識を伝えるだけではないことと授業の計画を立てる際には何を目的に活動を行うか、その活動を行うことで学習者に何が役立てられるかをきちんと考えた上で作る必要があることが分かった。授業は教師が一方的に行うのではない。学習者が中心になって行うことが望ましいだろう。

また、「教えることは学ぶこと」という言葉を実感することができた。授業中ある学習者に文法用法の違いについて聞かれたときすぐに答えられず一瞬止まってしまったことがあった。自分も日本語学習者でありながら日本語に慣れるにつれ、なぜこの文法をこう使うのかについて疑問を持たなくなってしまったことも事実である。また、自分が最初日本語を勉強していた頃の気持ちや心境を忘れていた。

最後に「仲間の大切さ」を感じることもできた。授業中学習者に自分の説明がうまく伝わらなくて戸惑った時、自分の代わりに Jr.先生や他の実習生が助けてくれた。そして、授業だけではなく日本以外の初めての異国での生活面・精神的面でも大きな支えになった。

### 2. 今後の課題

日本語に対する知識および教壇経験が大変不足していると感じた。特に初級学習者の場合まだ知っている文法・語彙知識が限られているので、学習内容をより理解しやすく伝えるためにはどのような授業計画を立てればよいかさらなる工夫が必要であると思われた。今回実習で得た経験を活かしていつかはひとりでコースをデザインし、運営できるようにしたい。

### 3. 今後に向けて

今回の実習をしながら何よりうれしかったのは学習者とともに共感できたことである。そして、日本語教師になることに関して漠然としたイメージを持っていたが、どのような役割を果たすべきなのか具体的に想像することができた。また、今まで自分の研究分野のみに興味を持っていたが、研究に関する視野をさらに広げて多角度から考える必要があると思われる。今後も日本語教育に貢献できるよう精進していきたいと思う。

## <清水晶子>

### 1. 実習の成果

実習に参加する前は、教壇に立ったことがなかったし、事前学習で学生主体について勉強しても、今まで自分が想像してきた授業イメージと異なったため、不安でいっぱいだった。しかし、UNSW に到着したその日から、学習者主体の授業を目の当たりにして驚き、「ここに来てよかった」と思う自分がいた。そしてチームティーチングの重要性を感じながらも、一人で成し遂げたいと思い、教壇に立った経験が全くなかったにも関わらず、Professional クラスに一人で実習に入ることを決めた。分からないことでいっぱいだったが、先生方や実習仲間たち全員にアドバイスをいただいたり、助けてもらったりしたことで安心して授業をすることができた。担当するクラスが異なっても、チームティーチングを意識することは大切であると感じた。また、実習生同士お互いの授業を見て意見を交換し合うことや、先生方とディスカッションを行うことで全体を見ることは、実習だからこそたくさん時間を費やせたのだと思う。実習に参加したからこそ、これらのことを学べたのだと思う。そのような仲間たちと出会えたことに心から感謝している。

また、学生たちとの交流を通じて、学習者は学習しているだけでなく、私たちと同じく日本語を使っている「日本語話者」であると強く思った。学んだことを生かして日本食レストランでアルバイトしている学生、将来日本で働きたい学生、将来日本語の先生になりたい学生、など、教室の中だけではなく外の部分もたくさん知ることができた。実習前は、文法や文化を教えることを重点に置いていたが、授業や学校は様々なことを教える場であるとともに、学習者たちに日本語を使う機会を与える場であったり、コミュニティを作る場であったり、日本語を外で使う機会を紹介・提供する場でもあるということ、実習を通じて学ぶことができた。

### 2. 今後の課題

まだまだ、色々な学習者やクラスを見る必要があると思った。初級クラス、中級クラスは見学に行ったり、少し手伝ったりただけで、どのくらいのレベルなのかどんなことを授業で行うのかを知るには限界があった。将来日本語教師、または日本語教育関係で働くなら、この実習で出会った学習者たちよりもっと多くの学習者たちに出会うことになる。様々なバックグラウンド、ニーズを知り、相手に合わせた授業をしていくためにも、また、自分が指導していくためにもっと多くの学習者たちや教師と出会う向き合い、勉強していくことが必要であると実感した。

### 3. 今後に向けて

UNSW から帰ってきた後も、実習仲間たち、そして実習に参加しなかった同期たちと日本語教育や授業について学んでいく場を作り共有したり意見交換を行ったりしている。今後も UNSW で学んだことを、別の現場や日本語教育に生かしていくために、また、同じ日本語教育のフィールドにいる仲間たちと頑張っていくために、もっと研究と勉強、実践を重ね、周りと共有したり周りから学んでいったりしていきたい。

## <唐姣姣>

### 1. 実習の成果

実習の前に、「学習者を主体に考え、進める」という目標を立てていたが、「学生たちはどうでしたか」と福井先生に聞かれた時、答えられなかった。そうなった理由は、自分が、何があまりよくできなかったかとばかりを考えて、自分のことだけ目に入ってしまったからである。先生方が、本当に重要なのは「学生たちが何を考えているか」「どんな反応をしているか」「何ができるようになったか」などであると教えてくれた。自分の不十分なところに気づき、授業の前に、「自分はどうでもいい、学生のことを良く見て、学生の反応をきちんと観察してください」と自分に言いかけ、授業中はそれを注意しながら、授業を進めた。今でも、学生を主体に常に考えるべきだということを中心に置いている。また、授業中、自分の不安・緊張を克服し、学生とインターアクションを取った瞬間の嬉しさは今でもはっきり覚えている。

また、今回の実習を通して、仲間の重要性を実感した。例えば、教案づくりをした際に、一人で作るのではなく、同じ **Introductory** クラスを担当していた実習仲間と一緒に考え、ディスカッションをした。そして、**Introductory** クラスを担当している **UNSW** の実習生に教案を見せて、模擬授業の練習をし、たくさんの貴重なアドバイスをいただいた。また、実習仲間たちが、私が担当していたクラスに来て、見学してくれた。授業中、学生の面倒を見てくれたり、仕事を分担したりしてくれた。授業後にも、感想やアドバイスなどを教えてくれた。仲間たちのおかげで、自分が仕事をうまくできたと考える。

### 2. 今後の課題

学生を主体にし、学生同士の学びを中心にし、教師一人の授業にならないように頑張りたい。学生を見ながら、授業を進め、学生にとって、どこが難しいか、どこが簡単なのかを考える。そして、学生は何ができていたのか、何ができていないのかを知り、できていない学生に何をしてあげればよいのかを考える。また、勉強の楽しさを学生に感じさせ、対話できるような授業を作りたい。

### 3. 今後に向けて

これから、できたことを続けていき、不十分なところを少しずつ改善していきたいと考えている。そして、学習者側のニーズに合わせ、持つ力・知識を引き出す工夫をする必要があると思う。また、ペア・グループの力を大切にし、学生を主体にし、学生と同じ日本語教育に携わっている仲間たちと一緒に学びたい。



## <八木友香里>

### 1. 実習の成果

私は他の実習生よりも日本語教師の仕事の経験が長い。今までは、教材の工夫、分かりやすい例文の提示、明瞭な話し方、モチベーションを高めるフィードバック、バランスの良いコースデザイン等、一人で何でもできるオールマイティーな教師になりたいと思って努力してきた。しかし一方で、何でも自己完結できるように個人プレーになっていく日本語教師も目にし、どこかで疑問を持っていた。今回の実習に参加したのは、一人でやらない教師になりたいと思ったからだ。

この実習の中でチームティーチングを体験した。同じレベルを何さんと一緒に担当し、岡本先生のサポートを得ながら、3クラス分の授業案や資料作り、教室活動など全て協力して進めた。正直に言えば1人でやるよりも時間がかかったところもあるが、何さんのおかげで今までの自分だったらこれ以上は無理だろうと思って妥協していたところにも、納得するまで向き合うことができた。自分1人では気がつかなかった部分にも目を向けることができ、今回の実習に参加して本当に良かったと思っている。

また、UNSWの日本語コースの教育方針に基づいた実践をしている先生方から学んだこともたくさんある。中でも、学生は役割を持つことでより大きく成長できるのだということが一番感じた。UNSWでは、学生が主体的に動くような仕組みが組まれている。例えば、日本語3年生のクラスで言えば、授業を運営する日直係、ボランティアやコンテストへの参加、2年生クラスのサポートなど、様々な課外活動や係への参加を成績にリンクさせることで、必然的に学生主体になる場を設けている。Capstoneの授業からもそれを感じることができた。いかに教師が力を出すかを考えるのではなく、いかに学習者の力を引き出すかを考え、環境やシステムを整えるべきなのだということが分かった。

### 2. 今後の課題

学習者は教室の中だけで学ぶわけではなく、教師は一人で教えるというわけでもない。今回の実習を通して、そのことを強く感じた。このきっかけを大切にして、私が日本語教師として働くときには、独りよがりになるのではなく、他とのつながりを常に視野に入れて行動し、他から自分への影響、そして自分から他への影響について今後も強く意識していく必要があると考える。

### 3. 今後に向けて

実習を終えて、これからも日本語教育に携わっていきたいという気持ちが強くなった。今後は、日本語学習者が教室の外と関わって日本語が使えるような機会を模索したり、教師同士が協働する環境づくりを進めたりするなど、良い意味で“周りを巻き込む”日本語教師になりたい。

## おわりに

八木友香里

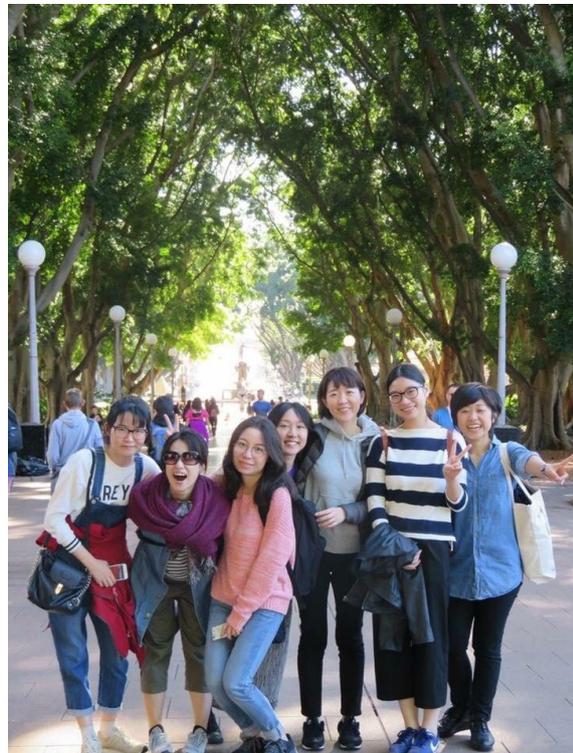
私達の普段の大学院の授業や研究では、日本語教育の理論面について考えることが多く、実践の場はそれほど多いとは言えない。これから将来、研究者になるとしても、教師になるとしても、教材開発者になるとしても、様々な日本語教育の現場に触れる機会です。学んだ知識は今後必ず活かされるだろう。

今回のシドニーでの教育実習では、マレーファーム小学校や North Sydney Girls High School を訪問して、多様な教育実践の場を目にし、新しい発見をすることができた。UNSW においてもクラスによって、または学生によってそれぞれ学習状況に違いがあり、新しい気づきの連続だったが、教壇実習が上手くいかずに悩むことも少なくなかった。そんな壁にぶち当たった時、私達にはいつも相談できる先生がいた。トムソン先生、福井先生には毎週のミーティングで 1 人 1 人の悩みに対して心のこもった指導と励ましをいただいた。そして、橋本先生、岡本先生、飯田先生も未熟な私達のために時間を割いてくださり、それぞれのレベルのクラスの実情に応じた的確なアドバイスをくださった。また、非常勤講師の中村先生や大浜先生にも授業見学をさせていただいたり、授業時間外にもスピーチコンテストに出場する学生の練習にとことん付き合う先生方の背中を見たりして、大切なことを学ばせていただいた。日本語クラスで学ぶ学生の皆さんも私達を温かく迎え入れてくれたおかげで、実習の緊張と不安が和らいだ。UNSW 大学院生の Sally さんや卓也さんにも実習期間中多大なサポートをいただき、院生勉強会に参加する皆さんとの交流の中でも、非常に大きな刺激を受けることができた。このことがきっかけで、日本に戻ってからも今回実習に行ったメンバーを中心に、ゼミを超えた自主的な勉強会を毎週行うようになったのは大きな進歩だと思う。この経験を経て、将来それぞれが別の場所で日本語教育に携わることになったとしても、きっと何かの形で協力し合えるだろうと考えている。

実習前の事前学習で学んだことの一つに「学習者オートノミー」という言葉がある。それは、学習者が自分の学習目的に応じて内容や方法を選択し、計画の実行、結果の評価を行うことができる能力だということ。それは決して独学を奨励するものではなく、人的リソースの有効活用と学習過程への積極的な参加を必要とするものであり、UNSW での日本語教育実習を通して、学習者オートノミーの促進がいかに大切なものであるか実感することができた。そして、それは日本語を学ぶ学生の中だけではなく、私達実習生の中にもあると感じた。例えば、誰かが教壇実習をしている時、別の実習生はそれを客観的に見てアドバイスができる。どうしても教室で目が届かないところを別の実習生がサポートできる。日本語話者の人数が必要な時に他の実習生が入って手伝うことができる。3 年生の授業プランを立てるときに 2 年生ではどうやっているか話を聞いて役立てることができる。誰かが風邪を引いたら他の人が薬を持って来る。スーパーに行ける時間がある人が他の人の分もまとめて買い出しする。得意な人に教わりながら料理を作る。誕生日の人がいたらお祝いする…など、実習内容に限らず生活面においても力を合わせて、まるで 7 人家族のように支え合って過ごすことができた。これは私達実習生の中でもオートノミーを育てることができた証拠だと思う。

今回の実習の実施にあたり、森山先生にはご多忙の中にも関わらず、始めのオリエンテーションから奨学金に関する交渉、渡航や宿泊などに至るまでの様々な手配、事前学習など多方面からお世話をさせていただいた。そして現地での生活や教壇実習についても直接 1 人 1 人に温かいアドバイスをくださり、私達の大きな心の支えとなってくださ

った。また、加納先生からは「日本語教育学実習」の授業を通して、教材の扱い方や教案・教材の作成、授業での振る舞いなど、教室指導の基礎となる大切なことを教えていただいた。さらに、前年度以前に実習に参加した先輩方からも事前にアドバイスをいただき、渡航に備えることができた。改めて、今回の日本語教育実習に際してお世話になったお茶の水女子大学の先生方、UNSWの先生方、その他、奨学金などで多大なお力をいただいた国際交流基金、お茶の水女子大学の国際課の皆様など、お力をいただいた全ての方々に、この場を借りて心からの感謝を申し上げたい。



## 「UNSW 実習」から学んだこと

加納なおみ

金秀恵さん、八木有香里さん、奥西麻衣子さん、清水晶子さん、何佳容さん、唐姣姣さん、閔暁晗さん、UNSW での実習修了、おめでとうございます。今年は国際交流基金から留学生も対象とする奨学金をいただき、7名もの学生をお茶大から送り出すことができ、そしてこんなにも多くの学生を UNSW の先生方に受け入れていただくことができ、ほんとうに有り難く思います。この貴重な実習の実現にご尽力くださったご関係の方々、先生方にまずは心より御礼を申し上げます。

4年前から担当している「日本語教育実習」クラスは、UNSW 実習参加者のうち、未経験者の履修が必修となっていますが、UNSW に行かない学生も受け入れています。今年は実習参加予定の履修者が過半数を占め、そのせいもあってか、何か特別な盛り上がりを感じていました。指導未経験者及び限られた経験を持つ院生を対象とした本クラスは、日本語教育に必要とされる基礎的な内容を扱い、短い模擬実習を行っていますが、今年は、八木さん、奥西さんという、指導経験が豊富な二人もできる形で関わってくれ、いつもより柔軟なクラス運営ができました。とはいえ、時間的に制約もあるなか、お互いが学習者役を務める環境では学びにも限界があり、UNSW に送り出す際には、毎年のことながら不安は拭えないのですが、参加者は大きく成長して戻って来てくれます。今年は特に様々な点で変化が目立ち、報告書も大変読み応えがあるものになったと思います。そこには、より多様な背景をもつ参加者の日頃の考えや実践が反映され、協働を通じて深まる理解や気づきが、率直に語られていました。様々なレベルで支え合い、学び合い、個々の参加者が自らの価値観や学びについて向き合い、根源的に問い直し、自己や周りの人々との対話から自ら多くの発見に至った足跡が浮かんできます。苦しい時間を乗り越えながら、貪欲に学ぼうとする意欲と、それを真摯に支え合う姿勢が共通して強く伝わってきました。そこには多くの批判的思考が生まれたことと思います。そして、そこでの学びを、皆さんは帰国後も勉強会の自主開催などを通じ、縦横に発展させ続けていることに、真の成長を感じます。これらが、事前準備の実習クラス指導担当の私が、皆さんの UNSW 実習のフィードバックから「学んだこと」です。今後のクラス運営に是非生かしていきたいと思っています。

このような非常に意義深い実践の場を与え、学生達を辛抱強くご指導くださった UNSW のトムソン先生、福井先生をはじめ、飯田先生、岡本先生、橋本先生、中村先生、大浜先生に、あらためて深く感謝申し上げます。ほんとうにありがとうございました。また、国際交流基金の関係者の皆様のご理解とご支援に厚く御礼申し上げます。そして、本学の森山先生のご尽力に心から感謝の気持ちをお伝えし、結びにかえさせてささせていただきますと存じます。

## 実習を終えて

森山新

今年度から国際交流基金の「海外日本語教育インターン派遣プログラム」に採択されたことで、参加者の経済的負担などが軽減され、7名の参加のもと実施された今回の実習は、単に参加者数のみならず、その質の面においてもこれまで以上の成果を収めることができた。参加した学生たちは、引率の私が見ても、本当に寸暇を惜しんで準備などに最善を尽くしており、時折私の方から、週末ぐらいはのんびりオーストラリアを楽しんでもいいのではないかと提案したほど、学生たちは、夜遅くまで準備などに時間を費やしていた。

今回の参加者は、日本語教育経験者と未経験者、日本語母語話者と非母語話者がちょうどバランスよく含まれていたが、お互いに補い合い、協力し合いながら行うその姿はそれこそ、ニューサウスウェールズ大学における日本語教育がよって立つ社会文化的アプローチや、コミュニティオブプラクティスの考えに沿うものであったかと思う。これまで日本語教育経験を持っていなかった学生、とりわけ日本語を母語としない学生にとっては、毎日が試行錯誤の連続であったかと思うが、それを一つ一つ周到な準備をしながら実践に移す姿は、同じ学習者であるニューサウスウェールズ大学の学生に必ずや感動を与え、よきロールモデルとなったことと思う。また日本語教育経験をすでに有していた学生ですら、新たな理念のもとで行われる日本語教育実践から多くのことを学んでおり、参加前には参加すべきか悩んでいた学生も参加してほんとうによかったといった感想を述べていた。

グローバル時代を迎え、第二言語教育とそれに携わる第二言語教師の役割はますます重要なものとなっている。今年度世界ではイギリスのEU離脱、トランプ政権の誕生など、国境を越え、共に生きることをめざしてきた人類にとっては大きな試練の年となってしまった。我々はややもすると他者から目をそらし、自己中心的な視点から物事を見つめがちである。これまでEUの教育理念を模索してきたバイラムは、その著書でインターカルチュラルなシティズンシップ教育としての外国語教育の役割について述べている。それによればグローバルな時代にあって世界が共に生きるためには、外国語教育を通じて国境や文化を超えた視点を養うことが重要であるとしている。その意味でも日本語教育に携わる者がどのような姿勢で教育に臨むかは今後世界が共に生きる道に進むのか、それともさらにナショナリズムへと逆戻りするのかを左右する。今回実習を経験した学生たちに望むことは、今回の海外日本語教育経験を一つのステップとして、日本語教育を通じ、世界が共に生きることに貢献する者となってほしいということである。参加者の皆さんの今後の活躍を祈る。

<実習参加者・報告書執筆者> ※五十音順

閔曉晗 (博士前期課程 1年)

奥西麻衣子 (博士前期課程 1年)

何佳容 (博士前期課程 1年)

金秀恵 (博士後期課程 3年)

清水晶子 (博士前期課程 1年)

唐姣姣 (博士前期課程 1年)

八木友香里 (博士前期課程 1年)



2016年度

ニューサウスウェールズ大学 (UNSW) 海外日本語教育実習報告書

2017年3月31日発行

発行 お茶の水女子大学

大学院日本語教育コース

グローバル教育センター

グローバル人材育成推進支援センター

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Tel/Fax 03-5978-5691

編集 森山新、清水晶子、奥西麻衣子